

学生リーグの思いで



東京経済大学空手道部（平成7年度卒）

喜納 修

「正面に礼、お互いに礼」と対戦校を前にして主審がコールをした時、何処へ向けて礼を行えばいいのかさえ分からず、ただただ緊張に足がすくんでいた。大学に入学して空手を始めて2ヶ月、初めての試合、そしてそこは強豪ひしめく1部リーグのコートであった。これが私が初めて経験した学生リーグであった。

試合会場にいる選手はすべて自分より強く見えて、黒帯のみで団体を組んでいる大学に対してはそれだけでも、ものすごい威圧を感じないわけにはいかなかった。我が大学は主将の先輩が唯一の黒帯で、後はほとんどが空手の経験がない1年生－白帯軍団－であった。1部校として名を連ねていたとはいえ、ほんの数ヶ月前まで部の存続さえ危ぶまれていたチームである。当然ながら試合結果は散々たるもので、1部リーグ最下位、入れ替え戦も敗退し2部降格となった。その敗戦が続く中、私は偶然にも出会いの中段逆突きで技有りをひとつ取ることができた。もちろん意識して狙った技では決してなく、またそのような技術など持ち合わせているはずもない“不思議な技有り”であった。しかしそんな技有りひとつがその後の空手そのものへの取り組み方を変えてくれた。それは偶然の技有りではなく、どうすれば確実に技を極めることができるのだろうか、という課題を見つけたことであった。

その年より空手道部の師範となられた田中先生の厳しいご指導のもと、我々は再び1部昇格を目指し日々の稽古に取り組んだ。そして1年半後の秋季リーグ戦において－白帯軍団も成長を遂げ茶帯軍団となっていた－2部リーグ優勝を果たし、入れ替え戦にも勝利して念願の1部昇格は果たした。

個人戦とは異なり、大学の看板を背負い戦う団体戦は独特の雰囲気がある。チームとして目標を掲げ、道場では先輩も後輩もなくライバルとして競いながらも、技術的にはそれぞれの良い面を吸収して、高め合っていかなければ勝ち上がれない。

リーグ戦での様々な“ドラマ”は私のその後の人生にも大きな影響を与えてくれた。今も現役学生とともに汗を流し、指導をしているのは学生もまた様々な“ドラマ”を経て成長していく姿に喜びを感じるからである。

このような伝統ある大会に感謝を致すとともに、参加選手にもまた様々な“ドラマ”が生まれることを祈念申し上げる。